

# 京都は会いに行くところ

文 森村泰昌  
Morimura Yasumasa

画 浅妻健司

「そうだ 京都、行こう。」これは、某鉄道会社のキャンペーン広告に使われている、有名なキャッチコピーである。1993年に登場し、今にいたるまでずっと続いているのだから、京都がいかに人気の観光スポットであるのかがよくわかる。それはそうなのだが、私にとっての京都はそれとはちょっとちがっている。

かれこれ五十年ばかり前、と話はずいぶんさかのぼる。私はかつて美術大学の学生として、京都に通学していた。その後しばらく経って、今度は教えられる側から教える側に転じ、やっぱり京都に日参した。もしかしたら、授業をさぼりがちだった学生時代より、教える立場になったときのほうが、こまめに行っていたかもしれない。そしてやがて京都は、自分が制作した美術作品の重要な発表の場ともなっていた。

私は生粋の京都人ではない。まったくもって部外者である。だが一過性の観光客でもなかった。私にとって京都とは、若い時分から頻繁に行き来させてもらってきた、なんというか、懇意な親戚筋といったイメージが強いのである。

長いつきあいなので、京都の思い出は尽きない。

コロンビア大学のエンブレムが刺繍されていた。冬だと赤のタートルネックのセーターを着込み、太い金のチェーンのネックレスを首からぶら下げている。

これだけを聞くとキザなようだが、洋風の顔立ちと痩身で足長という、そのスタイルの良さが服装とよくマッチしていた。ぬかみそ臭が皆無で、当時としては珍しいその異国的な雰囲気によって、学内の誰もが一目置く存在であった。

後年、私はサトウ先生のカバン持ちのようなことをさせてもらった。授業前の私の日課といえば、大学の裏門から酒屋にひとつ走り、ウォッカを買ってくることだった。

先生は、氷の入った大振りのタンブラーにウォッカを注ぎ左手に持つ。そして右手の人差し指と中指で、チョークではなく両切りのカメラを挟む。つまり、今では考えられないが、酒と煙草を教室に持ち込んで授業がはじまるわけである。写真論を中心とするその斬新な講義内容は、今でも私の写真美学の基礎となっていて生き続けている。

もうひとりの恩師、梅原猛先生は、私が入学したのと同様に、某総合大学から美術大学へと赴任された。ニーチェ哲学やトインビーの歴史観から、歌舞伎や能のおもしろさまでと、講義の内容は多岐にわたっていた。それらのすべてが私には刺激的な初体験だった。

私が受けた講義のひとつで、先生は「今話して

しかしそれは、由緒ある古寺や風光明媚な自然といった観光名所についてはなく、人との出会いの貴重な記憶のほうが圧倒的に多い。私にとって、京都は何かを見に行くのではなく、親しい誰かに会いに行く、一種の待ち合わせ場所だった。

20歳そこそこの学生時代に出会った、強烈な個性の持ち主がふたりばかりいる。誰かというと、写真家のアーネスト・サトウと哲学者の梅原猛である。ともに大学時代の恩師だった。

アーネスト・サトウは、日本人の父親とアメリカ人の母親を持ち、アメリカで写真家となった。日本を取材するために「来日」し、そのとき知りあった京都の某老舗旅館の女主人と結婚。結果、京都市立芸術大学で教鞭をとることになった。

サトウ先生はともかくお洒落だった。1970年代はじめ、私が入学した頃の美大生たちのファッションは、いわゆるヒッピースタイルが主流で、はっきり言ってみんな汚かった。先生たちも同様だった。男性は伸ばし放題の長髪にボロボロの裾広がりのジーパンというのが定番だった。

サトウ先生だけはちがっていた。グレーの細身のスラックスと紺のブレザー。胸元には出身校である

いる内容は、もうすぐ世の中に大きな衝撃を与えます」と何度もおっしゃった。それは聖徳太子と法隆寺をめぐる独自の考察で、これが本となって世に出たとき、先生の予告通り賛否両論が巻き起こった。私は、梅原日本学のはじまりとなった名著『隠された十字架』を、リアルタイムでそれもライブで教えてもらっていたのだった。

サトウ先生はアメリカからの帰国者だった。梅原先生の郷里は宮城県仙台市であった。ふたりとも京都弁を話さなかった。しかし縁あって、人生のある時点から京都で暮らし始め、最期は京都に骨を埋めた。今は亡き恩師たちのことが、京都とともによみがえる。それはまるで、三間四方の舞台に立ち現れる夢幻能を観劇しているかのようである。

コロナウイルスがおさまったら、「そうだ 京都、行こう」。驚きや喜びや悩みや哀しみとともに去来する、私の過去の記憶に再び会いに行くために。

もりむら・やすまさ 1951年、大阪府大阪市生まれ。大阪在住。京都市立芸術大学美術学部卒業、専攻科修了。1985年、ゴッホの自画像に扮するセルフポートレート写真を制作して以降、今日に至るまで、一貫して「自画像的作品」をテーマに作品を作り続ける。京都府文化功労賞(2006)、第24回京都美術文化賞(2011)、京都市文化功労者(2013)、紫綬褒章(2011)など。主な著書に『美術、応答せよ!』(筑摩書房)、『たいせつなわすれもの』(平凡社)、『自画像のゆくえ』(光文社)、『ぼんきであそぶとせいかはかわる』(LIXIL出版)

